少子化対策・女性の活躍促進・
スポーツ振興対策特別委員会県内調査概要

令和６年８月２７日（火）

Ⅰ　げんきみらい食堂（こども食堂）（橿原市四条町７７６－１）

【調査目的】

こども食堂にかかる取組について

【調査概要】

げんきみらい食堂は、こども食堂として、「みらいチケット」というツールを使って、地域の大人が子供たちの成長を支える取組をしており、この取組がげんきみらい食堂から全国にも広がってきていることから現地を調査した。「みらいチケット」とは、大人が購入したチケット（カレー代金の寄付）で、子どもが無料でカレーを食べることが出来るという仕組みで、平成３０年から始まっている。また、無料学習支援として「げんきみらい塾」も運営しており、常設の店舗として営業している。

＜げんきみらい食堂について＞

げんきみらい食堂は、食堂として営業している店舗である。大人には１食２００円でカレーを提供しているが、子どもが来店したときは子ども食堂として、１食１００円で提供している。さらに、子どもには、地域の大人が購入し、店舗で預かっている「みらいチケット」を使用すれば無料でカレーを食べることもできる。

営業は週４日。代表の齊藤氏は、月１回程度しか営業できない子ども食堂が多いが、そのような営業形態では本当に子供たちの支援になるのかとの思いがあり、いつでもお腹がすいたときに駆け込める場所が必要だろうと考え、店舗を構えて運営を行っている。

常設の店舗であることから、定期的にカレーを食べに来る子どももおり、顔なじみになり、会話を続けることで人間関係が構築され、居場所としても機能している。

このような活動に共感した企業や農家から、鶏肉やお米などの食材の寄付等の支援を受けているが、十分ではなく、実際には、齊藤氏が活動資金を負担している状況である。

＜げんきみらい塾について＞

無料学習支援として「げんきみらい塾」を週２回開設している。げんきみらい食堂の営業を終えた後、現役教員や学生ボランティアによる学習支援を行うほか、外国人講師による英会話などのふれあい活動も行っている。

高校受験を控えた子どもたちが、げんきみらい塾で学習支援を受け、志望校合格を果たすなど、継続的に子ども達の将来を支援している。

＜みらいチケットから寄付の見える化＞

大人が、みらいチケットを購入すると、そのチケットが食堂のホワイトボードに貼られる。来店した子どもたちがチケットを１枚取るとカレー１食を食べられるという仕組みになっている。そのため、購入者がホワイトボートを見ると、自分の購入したチケットが使用され、子どもがカレーを食べたことがわかるようになっている。

一般的な寄付は、誰にどのように使われたかわからないことから、みらいチケットでは、「寄付の見える化」を目指している。さらに、新たな取組として、みらいチケットを購入した人のチケットが、使われたときに購入者へ通知される「返事のある寄付」を目指したアプリの開発も進めている。将来的には、協賛企業・商店を増やして、子ども食堂以外のサービスについてもアプリ上での寄付の受付や、寄付者への通知がされるような仕組みを目指している。

＜質疑応答＞

Ｑ：いつも誰か仲間がいる場所に通うことができるという善意とニーズをうまく繋いでいく仕組みだと思うが、アプリにその機能を持たせて、返事が見えるということ以外に何か考えているか。

Ａ：自分の行った寄付が、どこで誰に何に使われたということが分かる仕組みがデータで残るため、寄付の使われ方の透明化に繋がると考えている。その仕組みを、奈良県から全国、世界に広がっていく流れを作っていくことができれば、寄付の概念が変わるのではないかと考えている。

Ｑ：行政に対して、どのような支援を望んでいるか。

Ａ：橿原市には、子ども達の成長に関係する業種の事業者に、みらいチケットの仕組みの導入の働きかけをしてもらっている。加盟をしてもらえる店舗を増やし、地域通貨のような形でこの仕組みが広がれば、子ども達への支援に繋がる。今はカレー屋をしているＮＰＯ法人という目で見られてなかなか話を取り上げてもらえないので、行政も関わっているという信頼性の部分の協力をお願いしたい。

Ｑ：長期休みや放課後の居場所づくりでは、金銭的な負担がないよう、地域の公民館を使用したり、ボランティアを募ったりと課題があるが、みらいチケットの仕組みで課題解決はできるのか。

Ａ：本業があるので、今の活動はできているが、毎月赤字である。行政に補助金を出してほしいと要望するのではなく、地域の力を借りて、地域で助け合って支え合う仕組みを作ることが必要だと考えている。例えば、塾代が１カ月１万円であったとしても、みらいチケットを使う生徒の塾代に関しては６千円の負担でよいとして塾にも登録をしてもらうという形で、地域の力で進めていく方法を採りたいと考えている。

Ⅱ　奈良文化幼稚園（葛城市疋田６８７）

【調査目的】

多様な自然環境等を積極的に活用した様々な体験活動及び子育て応援にかかる取組について

【調査概要】

令和５年４月に幼稚園型認定こども園に移行し、奈良っ子はぐくみ自然保育認証制度の認証団体として教育活動を行っている。

教育理念は「遊びこそ学び」。教育方針は、広々とした園庭、豊かな自然とのふれあいの中で、のびのび遊び、心身ともに調和の取れた人間としての基盤を培うこととしている。園児数は１歳児から５歳児クラスまで全１１クラス１６６名。

＜特色ある取り組み＞

◆わんぱくの森プロジェクト

２０１５年から開始されたプロジェクト。園庭は「屋根のない保育室」と捉え、毎日過ごす園での外遊びの時間で、子ども達が自由に主体的に夢中で飛び込んでいく園庭を目指し改修している。１０のエリアがあり、①ちゃぷちゃぷエリア（じゃぶじゃぶ池、プール・ウォータースライダー）、②ドキドキエリア（ターザンケーブル）、③ザクザクエリア（砂場、山の下）、④わんぱくエリア（くすのきすべりだい、ゆりかごスイング）、⑤ゴーゴーエリア（トランポリン、ゴーカート、ストライダー、こまなし自転車）、⑥どろんこエリア（ガチャポンプ、どろ池）、⑦さいばいエリア（プランターボックス、実のなる木、ピザがま）、⑧わくわくエリア（山小屋、丸太橋）、⑨ゆったりエリア（たき火、隠れ家）、⑩しゃかりきエリア（ゆらゆら橋、ぶらんこ）が整備されている。小さな怪我は、大きな怪我の予防となることや、土づくりを通して雑菌の中で育つことで、免疫力を高めるなど、日々わんぱくの森で子ども達は育っている。

◆玄米和食の健康元気給食を

食事は体づくりの基盤であり、味覚の形成や人格形成にまで深い影響を与えることから、安全・安心そしておいしい給食を求めて「玄米和食」による「健康元気」給食を展開している。毎日、玄米・納豆をしっかりと噛んで、丈夫な体づくりを目指している。また、「栽培から食まで」活動を行い、「何を食べるかで身体をつくり、いかに食べるかで心を育む」を合い言葉に、食に関する様々な活動を行っている。

◆感性の育ちと自由な表現活動

子ども達一人ひとりの「やってみたい」気持ちを出発点として、「遊びたい」ものを見つけ、選択することが自己表現の第一歩と考えて、発達段階に合わせた保育をしている。子ども達は、遊びを通して、将来の幸せにつながる「非認知力」（やりぬく力、自己肯定感、自制心など）を育んでいる。

＜子育て支援事業＞

教育活動の中に、保護者もどんどん参加してもらう取組として、「おひさまパン屋さん」を開催している。これは、保護者がパン屋となり、園の中で園児が実際にお金を使い、買い物の経験をする取組である。他に、保護者発信で青空コンサートの開催や、パパの会「かたぐるま」によるブランコづくりなどの園庭整備など、ママ・パパの笑顔は子どもの元気の源、自分の子どもの育ちを願うなら、周りの子どもも育てようという意識で、保護者も積極的に園での活動を行い、子育てを楽しむ契機としている。

＜質疑応答＞

Ｑ：わんぱくの森プロジェクトでは、さまざまなエリアがあるが、保護者からの反応はどのようなものか。

Ａ：家庭ではなかなかできない遊びを園で経験するので、保護者が本当に喜んでくれている。これだけ汚して帰ってきてくれてありがとう、と保護者から言われる。その視点があるということは、そこまで家庭ではしたことがなかったから。園では、じゃぶじゃぶ池のような家庭では管理が難しいような設備でも安全に楽しめるように園庭づくりをしている。

Ｑ：この保育室の木製の大型遊具は手作りか。（右下の写真）

Ａ：部屋を立体的に使いたいと考え、職員で製作した。子ども達が楽しく遊んでくれると、保育する方も嬉しく思い、どんどん工夫していこうという気持ちになる。自分たちで作ることで、子どもへの理解も深まる。